



開会挨拶は田村裕良会長

北海道土を考える会 第44回夏期研修会

▶7月10日
(北海道・上富良野町)



土中に埋め込まれたゴルフボール

ゴルフボールを探し当てた参加者には
景品を贈呈!

緑肥を細断するリボンローラー



写真撮影の時のみマスクを外して笑顔で!

7月10日(土)に北海道上富良野町の土の館ホワイト農場にて第44回夏期研修会が開催された。昨年はコロナ禍の影響を受けて中止せざるを得なかったため、久しぶりに参加した会員も含めて、全道から40名余りが集まった。

研修会に先立ち、田村裕良会長が、書面による総会決議の報告を行ない、会の今後の運営について報告した。現在の役員体制は来夏まで引き続き運営を担う。

肥料高騰で緑肥見直し

今回のテーマは、「地力と作業性を向上させる緑肥と土壌の混和について」。高収量・高品質を確保するための有機物の施用は下火になっている。昨今の国際的な需要の高まりから肥料価格の高騰が続くなか、改めて見直されているのが有機物の施用だ。輸送コスト等が

課題となる堆肥に比べて、自作地内で完結できる緑肥をもっと活用できないか。プラウによる鋤き込み作業と、細断作業を実演し、深く考えようというわけである。

まず、登場したのは、新型の浅耕プラウ(13インチ・リバーシブル・スリックボトム)。従来の深耕プラウ(20インチ・リバーシブル・格子ボトム)と反転具合を見比べた。16個のゴルフボールを事前に埋め込み、それぞれ反転作業を行なった後で、参加者がどこにあるのか探し当てた。その位置から、進行方向、横方向、深さ方向の移動量を検証した。さらに緑肥鋤き込み作業後の断面を見比べて、プラウの起こし山の高さ、横方向の移動量、緑肥の鋤き込み位置などを確認した。続いて、フロントに装着

した「リボンローラー」で、緑肥の細断作業を実演。見ていた参加者からは、土質の違う圃場や緑肥の種類を変えて、細断効果を見てみたいという声が上がった。

なお、現地に参加できない会員のためにライブ配信がテストされ、道内に加えて、府県の土を考える会の会員もモニター参加した。懇親・情報交換の場は設けられなかったものの、研修会の開催を喜び、互いの近況報告をする場面が多く見られた。

(加藤祐子)



本州初!! ようこそ、
LEMKEN FIELD DAY へ

LEMKEN FIELD DAY 2021 in IWATE

▶7月24日、25日
(岩手県花巻市)

写真・盛川周祐 (SFG代表)
文・清水一孝 (SFG事務局)

スマートファーマーミンググローバルズ岩手(以下、SFG岩手)は、東京オリンピックのオープニングセレモニーの華やかさの勢いさながらに、7月24日、25日に農業機械実演イベント「LEMKEN FIELD DAY 2021 in IWATE」を開催した。今回のイベントはコロナ対策のこともあって事前登録で参加費を有料としたが、北は青森から南は千葉まで180名近い事前申し込みがあった。当日受付で入場した人もおり、2日間合計で約200名の来場者だった。コロナ対策に万全を期して慎重に準備しつつも、にぎわいのある祭典となった。

農業従事者が自ら 企画&準備する意義

まずSFG岩手を紹介しておく。岩手県花巻市と北上市の農業者を中心に、2019年7月頃に発足したいわゆるサークル集団である。その目的は、最新のスマート農業技術の可能性についての実演会や勉強会を企画したり、農作物の栽培管理技術についての意見交換をしたりすること。代表は盛川周祐氏(有)盛川農場・代表取締役/岩手県花巻市)。産学官とも広く連携しながら、時には行政や

ディーラーでは主催しにくい内容についても本音で議論できる機会を作っていくこうとしている。

2019年12月に、東北一円の大規模農業生産法人や大学、研究機関と共に「安定的な生産のための省力・高品質・多収技術に関する意見交換会」を開催した。翌20年にも新たな企画を画策していたが、コロナ禍の影響で開催できず、何とか本イベント開催にこぎ着けた状況である。

さて、今回のイベント立案は、東北の冬の厳しさも少し和らいできた2月20日、小春日和の日に遡る。SFG岩手とレムケン社製品のインポーターである(株)IDECとが、IDECの本州拠点である宮城県栗原市で初めて顔を合わせた日である。IDECが本州で本格的にレムケン社製品のセールスを開始する準備をしているなか、SFG岩手と思考が一致したことから、今回のイベント開催の企画がスタートした。

一方で、SFG岩手側は農業従事者の集まりであるがゆえに、春の農繁期を乗り越えながらどれだけ準備できるかがポイントだった。当初は難題と思われたが、イベントへの期待感と情熱、そして文明

の利器として急速に普及したオンライン打ち合わせによる密な連携により、懸念は杞憂に終わった。

府県でもダイナミックな 機械体系が求められる

今回の欧州型機械化農業の農機実演会にご協力いただいたのは、農機ディーラー3社(ヤンマーアグリジャパン(株)、株みちのくクボタ、エム・エス・ケー農業機械(株)、農機インポーター2社(株)IDEC、(株)LMJ)。準備していただいたトラクターは豪華絢爛!! イベント会場はまさにレムケンブルーに染まり、華やかな彩りとなった。このようなイベントには心配事が尽きないもので、なかでも気を揉んだのはやはり天気である。しかし、ふたを開けてみれば、2日間とも最高気温30℃を超える晴れとなり、万全のコンディションで開催できたことは何にも代えがたいものだった。

20代から40代前半の比較的若い農業者が多数来場したことも主催者にとって嬉しいことで、レムケングッズの販売も非常に好調だった。

本題に戻ろう。今回のイベントのテーマは「5年後の作業体系を

出展したトラクターと作業機のマッチング一覧

	トラクターの型式	出力(PS)	作業機
①	ジョンディア120M	120	ルービン10(ディスクハロー・2.5m)
②	ジョンディア6155R	155	ヘリオール9(ディスクハロー・2.5m) +APVPS300(播種装置) +RPD255(ディスクハロー・フロント)
③	ジョンディア6215R	215	ルービン10(ディスクハロー・3m)
④	クラスARION650	185	ジュエル7(プラウ・7連) +フレックスバック(ファロープレス)
⑤	MF7715	169	カラット9(インテンシブカルチベーター・3m)
⑥	クボタM7172	172	サファイア9(シードドリル) +ジルコン300(パワーハロー) +バリオバック(ファロープレス・フロント)
⑦	クボタM135	135	ユーロパール6(プラウ・4連)
⑧	クボタMR1050	105	ヘリオール9(ディスクハロー・2m)
⑨	ジョンディア2250	66	アチャット70(カルチベーター)

めざして」である。地球温暖化による近年の異常気象や集中豪雨は私たちの農業を脅かしており、これまでの作業体系がいずれ何らかの変革を余儀なくされていることは明白である。今回実演機として登場した作業機の多くは、コンビ

作業機だった。これらの機械にさらにRTK・GNSSの機能等を組み合わせることで、高速かつ高精度の作業体系を構築して、天候に負けないものづくりができないか。そうした、ダイナミックなスマート農業の可能性について再考する良い機会になっていたら本懐である。

当然、コンビ作業を実現する大型トラクターを導入するための費用対効果の検証は必要だ。それでも人材不足、資材高騰、世界人口の増加やインフレによる輸入農産物の高騰が十分に予想される状況で、作業効率化やコスト削減の必要性は自明である。本州でもこのような機械体系の可能性やニーズは、より高まってくるのではないかと考える。

機械を囲みディスカッションする場をつくりたかった

また、欧州の環境に配慮した農業手法や倫理観からも、私たちが学ぶべきことは多くある。栽培方法も地域によって多種多様だ。だからこそ、東日本地域の農業者が一同に会してトラクターや作業機を観て、大いにディスカッションする機会を作りたいかった。

最近、府県でも100ha超えの法人や組織が増えつつある。今までのロータリー耕を中心とした日本型の作業体系の見直しや、若い農業経営者たちのニーズに応える新たな技術、機械が求められている。今回の試みによって生まれた潮流が、どこかの地域に流れ、導火線に火が点き、新しい農業のスタイルが構築されたとしたら、主催者にとってこれ以上の喜びはない。

《レムケン社の紹介》

レムケン社は1780年創業と、約240年の歴史があるドイツの農業機械・作業機メーカーである。日本では江戸時代中期、田沼意次の権勢に翳りが見え始め、天明の大飢饉による壊滅的な打撃を受けている頃から、欧州の農業の発展に寄与し続けてきた、同国を代表するメーカーの一つだ。その性能は、ドイツ人の民族性をもよく表す「質実剛健」そのもの。作業機は、大型トラクターへの装着を想定されたものが多い。

日本には北海道を中心に急速に導入が進められてきた。実は、日

い。未来の農業のために、本イベントが何かの小さな兆しになることを、関係者一同願っている。

最後に、今回のイベントにご協力いただいたヤンマーアグリジャパン(株)、(株)みちのくクボタ、エム・エス・ケー農業機械(株)、(株)IDEC、(株)LMJの関係各位には、多大なるご高配をいただき大変ありがとうございます。甚だ略儀ながら、誌面にて御礼申し上げます。

本への輸入の歴史は約20年前からと比較的浅く、日本の農業のスタイルの変化に伴い、同社の製品特性がニーズにマッチしてきたというところだろう。SNSなどオンラインで情報収集が容易な時代、本州の、特に大中規模の農業従事者のなかでは、欧米や北海道の機械化農業への理解が進んできた。そのなかでもレムケン社製品は特に注目を集める農機の一つとなっている。近年は本州の農業も少しずつ農機の大規模化が進んでおり、レムケン社製品に対するニーズも高まってきているようだ。



100馬力を超える超大型トラクターも多く集まり、レムケンの作業機がズラリと並ぶ光景は壮観だった



ブラウの後方の畝間リングが、起こし山を落ち着かせる



欧米のファームショーさながらのゲートが参加者を出迎えた



播種装置APVは、緑肥や牧草、小麦、乾田直播など、どこで活躍するか、播種の可能性を探ってみたいアイテムだ



すべての土壌条件に対応できるとされる屈強な作りの播種機Saphir9。府県でここまでの装備が必要な経営は限られる？



展示機械はそれぞれ試乗できるように準備した。府県では滅多に見られないトラクター & 憧れの作業機の乗り心地は？